

# みんなづくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 文化多様性の保護：雲南の探求と実践

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 謝, 沫華 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00008868">https://doi.org/10.15021/00008868</a>

## 文化多様性の保護

### — 雲南の探求と実践 —

謝 沫 華

訳：長沼さやか

- |  |                                      |
|--|--------------------------------------|
| 1 多元共生の雲南文化                                | 2.4 保護と開発の矛盾が日に日に突出してきている点           |
| 1.1 多民族多元性                                 | 2.5 伝統文化の保護と開発に時代とともに皆で進む精神が足りないという点 |
| 1.2 多地区、多流域性                               | 3 この20数年間の雲南における文化多様性の保護分野での探求と実践    |
| 1.3 文化の多層性                                 | 3.1 各級、各級の伝統型博物館の幅広い建設               |
| 1.4 多様に融合・吸収した包括性                          | 3.2 民族民俗文化村の建設                       |
| 2 雲南文化の多様性が直面する問題                          | 3.3 民間の民族文化伝習館の建設と撤廃                 |
| 2.1 経済社会発展の著しい遅れが伝統文化の保護と開発の妨げになっている点      | 3.4 民族文化生態村の建設                       |
| 2.2 伝統文化資源の消失・変化が著しい点                      | 3.5 民族文化生態博物館の建設                     |
| 2.3 いくつかの弱小民族の伝統文化は外来の主流文化の強大な衝撃を防御し難いという点 |                                      |

歴史、地理など多くの要素が総合的に影響しあうことで、雲南は多様な文化が豊富な地域となった。ここ20数年において、社会経済・文化の発展にともない、雲南の文化多様性は多くの問題に直面し、多元共生的な雲南文化は現実に表れてきた脆弱性に向き合うこととなり、雲南の文化多様性の保護は人びとの共通の呼び声となってきた。このため、雲南の各級政府、関連機構および組織、多くの有識者は、雲南の文化多様性の保護のために、積極的な探求と実践を行ってきた。本論文は多元共生的な雲南文化、および直面する問題、20数年来の雲南における文化多様性の保護の分野における探求と実践、文化多様性の保護についての若干の考察といったいくつかの方面から、大まかな検討を行ってゆきたい。

## 1 多元共生の雲南文化

雲南は文化多様性の豊かな地域である。雲南文化のもついくつかの特徴は以下のとおりである。

## 1.1 多民族多元性

雲南には多くの民族があり、多種の文化がそれぞれ特定の民族の個性を持つという、いわゆる「多民族性」を有する。これは中原地域には見られない文化現象である。各民族の歴史の根源からみるに、イ族、ハニ族、リス族、ラフ族、ナシ族などは古代西北の氐や羌などの部族を起源とし、草原の牧畜・農耕文化と高原の農耕文化をもたらした。チワン族やタイ族などは、古代南方の百越を起源とし、水田稲作文化と熱帯栽培文明をもたらした。ミャオ族、ヤオ族などは古代江漢（長江および漢水）地域の三苗九黎を起源としており、一種の移動農耕（焼畑）文化をもたらした。ミャオ族、ヤオ族などは中原文明をもたらしたばかりでなく、移住の過程で近隣の民族の文化をも広く吸収してきた。ワ族やプーラン族などに至っては古代モン・クメールの末裔であり、一種のまったく新しいモン・クメール文化を担っている。元明清時代、各地から雲南にやってきた多くの漢族、回族、モンゴル族は漢文化やイスラム文化、モンゴル文化をもたらした。このような文化の多重的な起源は、雲南の民族文化の多様性を成り立たせている。

## 1.2 多地区、多流域性

雲南文化のなかには、各種の典型的な文化が相対的に集中し1つの区域を形成し、「多地区性」を現している。雲南の文化区域は少なくとも5つある。昆明を中心とした滇池文化区、大理を中心とした洱海文化区、保山を中心とした永昌文化区、曲靖を中心とした滇東文化区、通海を中心とした滇南文化区である。一方で、流域性をもっており、青藏高原と横断する山脈により雲南の河流のほとんどは南北を縦に流れている。重要なのは、主として珠江流域、南盤江流域、紅河流域、瀾滄江流域、怒江流域、西から東に流れるものを加えると、四川と雲南にまたがる金沙江流域があり、西南で著名な六江流域を形成している。これが、自然が与えた雲南文化の生態的特徴である。これら山河は人類初期の民族と文化の回廊であり、異なる流域と回廊はそれぞれ相対的な文化的特徴を持っている。ある意味で、六江流域には全雲南の文化と歴史が沈殿しており、雲南全体の民族と文化を体現している。

## 1.3 文化の多層性

歴史で言うならば雲南の文化は、前漢時代の西南夷文化、東晋・西晋時代の爨文化、唐宋時代の南詔大理文化、明清時代の土司制度がそれぞれ1つの層を形成している。そして、歴史の過程において、雲南は東アジア南部の多種の文化を集め蓄積してきた。北から中原文化、南から東南アジア文化、東から江漢楚越文化が到来し、これにより雲南はアジア古代文化の1つの基層となり、あたかも宝のたまる鉢ようになったのである。

## 1.4 多様に融合・吸収した包括性

さまざまなものが集まって融合・吸収した雲南文化の包括性は、多元的な雲南文化が長期にわたって交流した自然の結果である。融合は次第に個々の民族の境界を打ち破り、新しい社会、経済、文化の形態を作り上げてきた。たとえば草原型文化はチベット族にとどまらないし、移動農耕（焼畑）型文化はミャオ族・ヤオ族、高山型文化はジンポー族、壩子（盆地）定住農耕文化はタイ族のそれぞれにとどまらない。また、世界の民族学の歴史は、閉鎖的な文化はどこにでも見られるが、開放的な文化は逆に探すことが難しいこと、文化の反発と衝突は往々にして文化の適応と融合よりも多く起こりうるということを示している。雲南文化は「跨国性」（トランスナショナル）、「跨境性」（トランスボーダー）、「跨文化性」（クロスカルチュラル）の要素を含んでいる。これは開放的な文化のタイプの1つであり、雲南文化の包括性を表している。パー族やナシ族の文化の発展は「海納百川、有容乃大（海は百の川を納め、融合して大きくなる）」という言い方の通りである。タイ族は南伝上座部仏教の真髄を得て、パーリ語系のインド・南アジア文化を受け入れ、豊かで深い「貝葉文化」を作り上げた。そのほか、「畢摩（ピモ）文化」や「貝瑪（バイマー）文化」なども、代表的な包括的文化である。

## 2 雲南文化の多様性が直面する問題

雲南文化は1980年代以降、雲南社会経済および世界経済の一体化をともなった発展により、以下のようないくつかの問題に直面している。

### 2.1 経済社会発展の著しい遅れが伝統文化の保護と開発の妨げになっている点

実のところ、中華人民共和国が成立して以後、雲南の各民族の生産生活には非常に大きな変化が生じた。しかし、基礎的条件の制約から、長い間解決することができなかった貧困の問題が、伝統文化の保護と開発を著しく阻んできた。雲南の貧困層は目下400万人以上を数え、省の全人口の一割を占める。こうした貧困層の多くは周縁部の少数民族地区に集中しており、物質と精神が対立、あるいは両立する過程において、後者がおろそかにされたり二の次にされたりしている。

### 2.2 伝統文化資源の消失・変化が著しい点

ここ20年来において、雲南や中国国内、はては世界に至るまで地理的距離が短縮された。大量の現代商品はその美しさや多彩さ、高級さや精巧さで、多くの民族の文化を色褪せさせた。多くの人、とりわけ若者は、度合いは異なるもののすぐに外来の生活様式と文化娯楽のやり方を受け入れてしまい、盲目的に外来文化を崇拜し、自分たちの地域

や自分たちの民族文化を軽視している。雲南の伝統的な文化資源はまさに、以下のような問題に直面している。1. 民族の古籍の保護に力を入れておらず、それを読める人が世を去ってしまったことにより、多くの民族の古籍が誰も解読できない難解な書物のようになってしまっている点。2. 民族文化財が大量に流失している点。3. 民族文化財の保護管理のための設備・手段が遅れており、すでに収集・入手した文化財に対して科学的な保管保存が実行されておらず、これまでその正常な働きを発揮できていない点。4. 多くの民族の民間伝統工芸が、後継者不足によりまさに伝承できなくなっている点、5. 多くの固有の習俗が商品経済の影響から、悄然として変容してしまっている点、である。

### 2.3 いくつかの弱小民族の伝統文化は外来の主流文化の強大な衝撃を防御し難いという点

経済と社会の発展により大きな格差が生まれ、経済社会の発展が遅れた周縁の少数民族の多くは、文化のうえで相対的に劣勢であり主流ではない地位に置かれている。それらは、外来文化や主流文化の衝撃と挑戦に直面した際には、いつもその脆弱さと無力さを露呈してきた。即座に壊滅させられてしまう場合すらある。そのため、伝統文化の保護に重大な影響を及ぼしている。

### 2.4 保護と開発の矛盾が日に日に突出してきている点

保護を軽んじて開発を重んじるというやり方は、伝統文化の保護と開発にとってますます頭を悩ませる問題になっている。専門家の言葉に耳を傾けることはできるが、政策を決定するにはやはり政治指導者が判断を下さねばならない。専門家は人文的関心を重んじるが、政府は任期における目標に着眼している。すなわち往々にして伝統文化の保護と開発には、早期解決が必要な矛盾が存在している。開発の問題上、一部の少数民族の大衆には、教育の不足により科学的、文化的知識が乏しいため、能力に欠け、自発的に伝統文化の保護と開発を進めることができない状況が広く見られる。たとえ、開発が進められたとしても、それは表層文化の開発の段階で滞ってしまい、さらに深い層まで掘り下げた文化の内面にまで立ち入らない。また、有形文化の保護を強調して重視する場合は多くても、民間音楽、舞踊、口頭伝承、言語、儀礼、芸芸などの無形文化の緊急の救助に注意を払う人は少ない。

### 2.5 伝統文化の保護と開発に時代とともに皆で進む精神が足りないという点

どのように伝統文化の内容を増強し、外来文化に学びこれを手本とし、伝統文化の中のいらぬものを取り除き、時代とともに皆で進むかは、依然として十分に注目されて

ならず、また少数民族自身もいまだ十分にこのことの重要性を認識していない。伝承を重んじ発展を軽んじる弊害も生じ、民族の伝統文化の活力と生命力の不足をもたらしている。

### 3 この20数年間の雲南における文化多様性の保護分野での探求と実践

1980年代以降、雲南では、文化多様性の保護の分野において、幅広い探求と実践が行われてきた。

#### 3.1 各級、各類の伝統型博物館の幅広い建設

1980年代以降、すでに設立されていた雲南省博物館（1958年設立）のほか、雲南各地に各級、各類の博物館が幅広く建設された。「地」級では大理ペー族自治州博物館、文山チワン族ミャオ族自治州博物館、楚雄イ族自治州博物館、迪慶チベット族自治州博物館など、「県」級では大理市博物館、勐腊県博物館など、高等教育機関内では雲南民族大学博物館、雲南大学人類学博物館などである。これら総合的で教育学習型の博物館のほかに、1995年には専門性のある博物館——雲南民族博物館が設立、開館し、伝統型博物館の形式で雲南文化の多様性を保護する作業は盛り上がりへと向かった。

多元文化が併存する雲南では、各種の文化の間にはつねに、互いに信用しなかったり、ひどい場合は嫌悪したりする現象が存在しており、これが偏見や誤解などの要因となっている。しかし、もっと多いのは相互の不理解や無知が引き起こす出来事である。雲南では各級・各類の博物館を建設し、人びとに各民族の文化生活を紹介することを通して、自らの価値を極め相互の誤解や偏見を払拭させ、人びとに自分たちの固有の伝統文化や生活様式、社会習俗を保持してゆくこと、人びとが自分たちの伝統文化を広く発揚し認識することを後押ししている。民族の文化遺産のなかの秀でた部分を継承することで、自らの伝統文化のなかに存在する問題に対して事実在即した討論を行い、そこから建設的な方法を模索するよう導き、あわせて努めてそれらを解決することなどの面で重要な作用を発揮しているのである。

#### 3.2 民族民俗文化村の建設

主体となる伝統型博物館は絶え間ない奮起によって、各民族の伝統文化を十分に展示している。くわえて、1980年代以降、伝統的な静態的展示方法を打破し、展示の形として直接観察する効果を強めるべく、1992年の雲南民族村の設立を機に、雲南各地で民族民俗文化村が建設された。民族民俗文化村は民族、または民間の生活をテーマとし、現代にまさに消滅に瀕している伝統的な生活様式を復元、または保存し展示している。改

革開放期を迎えて少数民族は自分たちの狭小な世界から都市へと出なければならなかった。自分たちの豊かな伝統文化を展示することは、外界を理解する機会や外界との交流を増やし、自民族や地域の開放発展をうながす一方で、日に日に現代化してゆく大中市の人びとに、古風で素朴、飾りのない「原生文化」を調合し、自らの生活を豊かにするために必要なものを共同で作出すことをも促進した。民族民俗文化村の出現は、中国内外の観客の目を楽しませると同時に、雲南各民族の多様多彩な文化に対する理解度を高めてきた。しかし、多くの民族民俗文化村の建設と発展は、観光業としての需要に着眼点を置いており、観光客を満足させる奇抜なものなど、低レベルな文化の需要が主である。その点でそれらは各民族の伝統文化を直接に、そして真正に反映することに一定の限界を持っている。

### 3.3 民間の民族文化伝習館の建設と撤廃

1993年以降、中国中央楽団の国家級の作曲家である田豊氏が自ら資金を工面し、雲南辺境の山村出身の少数民族の民間芸人を指揮して、雲南昆明に近い安寧市螳螂川にて中国で初めての民族民間文化伝習館を創立した。これにより彼らは、経済の大開発に直面して消滅に瀕した少数民族の無形文化遺産を保護・保存することを計画した。伝習館の収入源は、社会からの資金集めに頼っていたが、苦しみながら数年を持ちこたえた後、2000年に経済的な困窮と紛糾に見舞われ解散を余儀なくされた。

民族民間文化伝習館の出現は、伝統的な博物館が有形文化遺産のみを重視することを打破した。すなわち文化財の保護、無形文化遺産の保護と伝承を重要視することを始めたのである。しかし、創立者の過度の理想主義と時勢に合わない運営方式により頓挫した。伝習館の頓挫は、世の人びとに対して、異地、その民族の居住地以外で伝統文化の保護と伝承をしようとしても長くは続かないことを示した。

### 3.4 民族文化生態村の建設

雲南民族文化生態村の建設は、1997年に準備と計画がなされ、1998年に立項され始動した。そして騰衝県和順漢族文化生態村、景洪市巴卡ジノ一族文化生態村、石林県月湖イ族文化生態村、邱北県仙人洞イ族文化生態村、新平県南碱タイ族文化生態村など五カ所のモデル村が相次いで建設された。

雲南民族文化生態村の建設は、我々に一種の全く新しい文化保護と開発の理念とやり方を示した。それには以下のようないくつかの特色がある。1. 文化生態村は人工的に建設された博物館ではなく、文化、生態の典型的なコミュニティまたは村落である。2. 文化生態村の建設は発掘、整理、優秀な伝統文化の継承にとどまらず、優秀な現代文明の吸収をも必要とする。3. 文化生態村の管理は、当該地域の住民の参加を強調し、最終的には地元住民による管理と自分たちの力による発展によって実現する。4. 文化生

態村の建設は、経済発展の手段の探求が必須であり、人びとが富むことによってはじめてさらなる文化の繁栄がある。雲南民族文化生態村の出現は、現地で文化を総体として保護する理念と方法が雲南でも行われはじめたことを示している。

### 3.5 民族文化活態博物館の建設

雲南には独特で比類ない民族文化資源がある。しかし、今のところ雲南の各民族文化は、とりわけ人口が比較的少ない7つの民族の文化遺産の消滅や流失が大変ひどい状況にある。このため、消失の危機に瀕している7つの少数民族人口民族の有形無形文化遺産の救済、収蔵、保護、伝承は、非常に重要かつ、差し迫った問題である。

昨今、雲南民族博物館が提議した項目はすでに初歩段階の論証を終え、雲南において人口が比較的少ない7つの民族の文化遺産活態博物館（モデル）の建設事業に力を入れて展開することを定め、民族の集住村落の中から選ばれた地点において、各民族につき1つの活態博物館を建設している。民族の自信と誇りを確立し、民族文化の多様性の共存と、民族文化の多様性の共有の実現を促進する。

文化の多様性の存在と保護は、そのことを憂える意識と責任感のある学者それぞれが向かい合って、真剣に探究せねばならない問題である。私はこの事業を成功させるためには、以下のことを明確にしなければならいと考えている。第一に、人類文化が多くの文化によって構成されていること、各種の文化は各地域、各民族の人々が長い歴史の発展過程において創造し伝承してきたものであり、大切にしなければならない財産であるということを明確に意識せねばならない。第二に、世界は多元的であり、多元化の発展は世界の文化の発展の必然的な趨勢であり、各種の文化の存在価値と発展需要を尊重することによって、はじめて世界の文化発展の多元化が実現する。第三に、積極的かつ十分に弱勢の人びとの文化の発展と好転を助け、さまざまな過程や方法を通じて、彼らが自分たちの優秀な伝統文化を発掘、整理、伝承することを援助する。あわせて彼らの経済発展などの方式を支援することで、自らが自らの文化を保護し発展させることへの意識の目覚めを促し、文化の多様性の発展を促進する必要がある。第四に、それぞれの関連機関と人員が、文化多様性の保護の分野で連携協力し、文化多様性の保護の新たな道程と方策を共同で探求する必要がある。文化の多様性の保護は長期的かつ世界的な問題であり、世界の多くの国家や地域が積極的に探求と実践をおこない、多くの理論と経験を生み出しており、相互に手本とし参照する価値がある。我われが手を携えれば、必ず文化多様性の保護の分野において、さらなる偉業をおこなうと信じている。